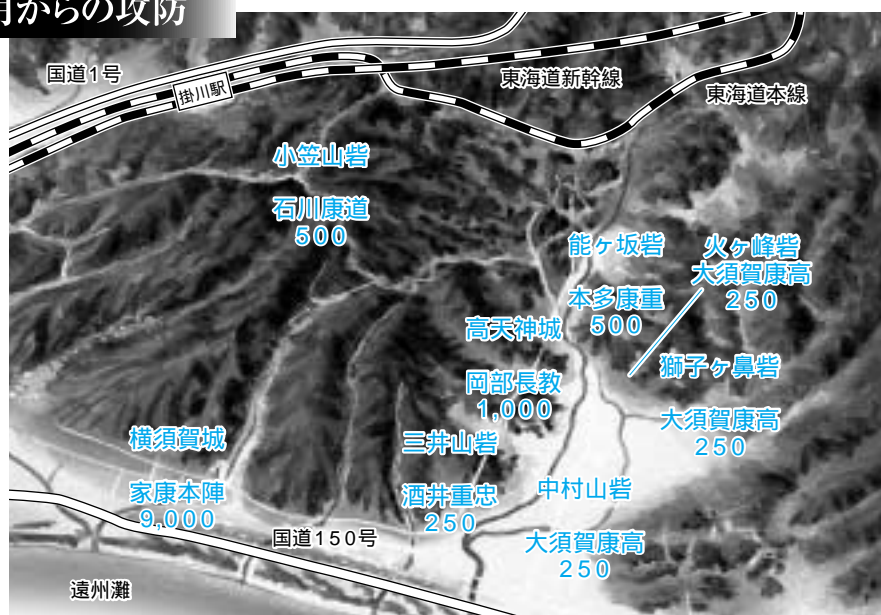


いつの時代も、天下を支配する将軍との関わりが深かった掛川

山内一豊までの掛川の武将たち — ⑤

1580年7月からの攻防



徳川軍
武田軍
数字は兵数

遠江を手に入れるため、家康は3年余りをかけ高天神城を包囲した。

高天神城の攻防

元龜2年(1571)武田信玄は小笠原長忠が守る徳川方の高天神城と一戦を交えるも、堅固で簡単に落ちないため掛川、久野城を視察し犬居を経て信州へ戻ります。当時は、全国で武士たちが領土拡張を進めていた時代で、天正元年(1573)には織田信長が室町幕府を倒し、戦国時代の真ただ中でした。1574年、武田勝頼は高天神城を攻め、宿願の城を落とします。しかし、その年長篠の戦いで武田が大敗を喫すると、勝頼の勢力は急速に衰えます。1578年、家康は高天神城を奪回するため、攻撃の拠点として横須賀城を築城し、周辺の小笠山、能ヶ坂、火ヶ峰、獅子ヶ鼻、中村山、三井山に6砦をつくり、高天神城を包囲します。

天正8年(1580)7月、家康は大軍を率いて浜松城をたち、横須賀城に入ります。城には家康の直属の武士3千人に加え、本多忠勝、榊原康政、鳥居元忠の約9千の兵。北方には石川康通5百、東方には本多康重5百、大須賀康高750、南方には酒井重忠250、合計1万1千の大軍でした。これに比べ高天神城の守備兵は、城将岡部長教、軍監横田甚五郎以下1千人の軍勢でした。孤立無援に陥った高天神城は、援軍派遣を幾度となく忍びに託し、勝頼の元に送りますが、その返事は期待はずれのものでした。勝頼としては援軍を送りたいところでしたが、北条氏政・信長と敵対しているこの時期、不可能な状態でした。

決死の総攻撃

天正9年(1581)3月、援軍の望みは完全に絶たれ、食料は尽きて雑草すら食べる最悪の状態となり、士気は低下し、餓死者も出始めました。ここに至っては、この城の運命は定まったものと、岡部長教は3月22日、総攻撃に出ます。決死の覚悟を決めた城兵は二隊に分かれ、一隊は林ノ谷口、一隊は龍ヶ谷に突撃します。これを徳川の大群が迎え撃ち、すさまじい戦闘が繰り広げられますが多勢に無勢、圧倒的な徳川軍勢の前に必死の戦いにもかかわらず、長教以下740人が壮絶な討ち死にを遂げ、高天神城は落城します。東遠江の牙城は再び家康の手中に帰し、遠江全域が家康の勢力圏になりました。

山内一豊の妻千代がお金を出して馬を買ったという「信長の馬揃え」が行われたのもこの年のことです。

翌天正10年(1582)勝頼が甲州で滅び、信長が本能寺で明智光秀に討たれ、秀吉が山崎の戦いで光秀を破り天下を取ります。一豊は秀吉と共に幾多の戦いに参戦し、天正13年(1585)長浜2万石の城主となります。



【巴風】
横須賀の三ツ巴と徳川の軍扇が武田の菱を挟む図柄になっている300年の伝統を持つ風。この当時、敵陣の測量や密書を送るため風が用いられたといわれています。



高天神城跡